

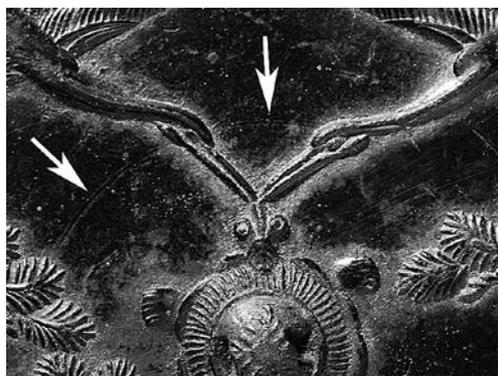


口絵 26 「青銅 松双鶴文鏡」(黒川古文化研究所)



〔新収品紹介〕 松双鶴文鏡

川見典久



「松双鶴文鏡」(口絵26)は直径18.5cmの比較的大ぶりの薄造りの円形鏡である。周縁部(外縁)は幅0.5cm、高さ0.6cmと厚く作り、やや内傾する外側面を凸曲するように仕上げているため、上面は幅0.3cmと狭くなっている。その内側には二重の凸線(界圈)を巡らせ、外縁とともに補強の役割を持たせている。背面中央に亀形の鈕を設け、向かい合って飛ぶ鶴2羽を亀と口先を接するように配する。

このような文様構成は室町後期から江戸時代にかけて流行し、形式に近い作例として、「松竹梅紋双鶴鏡」(東京国立博物館)や「扇地紙流双鶴鏡」(京都国立博物館)などがある。脚先が界圈にかかるように大きくあらわした鶴や、甲羅に花菱をあしらった亀形鈕の表現、二重の界圈などに共通性があり、面径もほとんど変わらないが、鶴の配置や頸の角度、羽の広がり方には製作意識の違いがあらわれている。前者は下半に松と梅の丸文様を3つあしらい、後者は余白にあらわした流水文に小さな扇形を散らしている。

本鏡の場合、鏡背面の半分を占めるほど大きく松樹をあらわしている点が珍しい。肥瘦のある二重線により分岐し力強く張る根をあらわし、上方に生えた幹は鈕の手前で左右に分かれる。そこから蛇行して左右に伸びた枝は、さらに分かれた枝と交差しつつ広がる。ここまで複雑かつ大きく松をあらわした作品はほとんど例がなく、絵画史との関係も注目される。幹や太い枝は短い凸線を連ねて破線状に輪郭をとり、その内側を盛り上げて丸みを立体的にあらわす。また、右側に伸びた枝は界圈に絡みつくように蛇行しており、まず鋳型上に凸線を引いた後に文様を刻したと推察される。内区には同心円に細い凸線が2本巡るのが見て取れ、このうち内側の凸線上には鶴の頭、外側の凸線には鶴の羽先が掛ることから、文様を配置するための見当線とも考えられる(左頁矢印)。

鶴と亀は、「玉策記に曰く、千歳の亀は五色を具ふ。その額上両骨起つこと角に似、人の言を解す。蓮葉の上に浮き、或は叢著の下に在り、その上時に白雲蟠蛇する有り。千歳の鶴は時に隨て鳴き、能く木に登る。その未だ千載ならざる者は、終に樹上に集わざるなり。色は純白にして脳は尽く丹と成る」(晋・葛洪(283-343)『抱朴子』内篇 対俗)とあるなど、中国では長く生きると特別な外見を持ち、神仙と関わりと考えられた。北魏・盧元明が『嵩高山記』に「嵩岳に大樹の松有り。或いは百歳、千歳、其の精変じて青牛と為る。或いは伏亀と為る。其の実を採りて食すれば、長生を得」(『藝文類聚』卷88 木部上)と記すのをはじめ、松も長生を象徴する植物とされた。日本においても中国の東海にある仙山をあらわした蓬萊図の主要なモチーフとして鶴・亀・松の三者が見え、その思想が共有されていたことが窺える。

さらに、この二股の松には「相生の松」がイメージされたと考えられる。『古今和歌集』仮名序に「高砂、住江の松も相生ひのやうにおほえ」とあり、ここから着想を得た謡曲「高砂」では、高砂(兵庫県高砂市)と住吉(大阪市住吉区)の松が老夫婦に姿をかえて現れる。近世には夫婦和合や長寿を言祝ぐ吉祥の画題として、根元をひとつとする双松が絵画や工芸にもさかんにあらわされた。

なお、背面には腐食防止のために黒い漆が塗布される。鏡面には薄く鍍錫(錫めっき)の痕跡が残るものの、大半は剥げて黄褐色の地がねが覗いている。蛍光X線分析による金属組成の調査をおこなったところ、銅(Cu)約90%、錫(Sn)2%弱、鉛(Pb)2.5%弱と、錫や鉛が極端に低い結果を得た。他の研究所収蔵品の調査において近世の薄い大型鏡や柄鏡に同種の組成の例がある。上記のような形式や組成調査の結果より、製作年代は室町末期から江戸初期(16世紀後半～17世紀前半)と推測される。仕覆と桐箱に納められるがともに近年のものに見受けられ、他に伝来を示す付属物はない。平成25年度購入品。